

加藤美奈

カヌースプリントジュニア
日本代表
登米高校3年



Kato Mina

1999年1月11日、米山町生まれ。中学時代は、陸上部に所属し、100mハードルや走り幅跳びで活躍。登米高進学後、カヌー部へ入部する。負けん気と持ち前の持久力で徐々に頭角を現し、1年秋の東北新人大会カヤックシングルで4位入賞を果たす。昨年はインターハイ、国体など各種全国大会へ出場。父、母、兄、妹の5人家族。身長153cm、血液型O型。趣味は音楽鑑賞。好きな芸能人は「NEWS」の増田貴久

登 米高カヌー部、加藤美奈。登米発世界行きの切符を手に入れた。

5月3～5日に、石川県小松市で開催されたカヌースプリント海外派遣選手最終選考会(以下、選考会)。女子カヤックシングル500mで2位となり、ジュニア日本代表に選ばれた。女子カヤックシングルの代表選出は県内初の快挙だ。代表入りについて「本当に私でいいのかなんて。私より強い選手はたくさんいるのに」と遠慮気味に話す。しかし「選ばれたからには、ベストを尽くし力を出し切るだけ」と語る目には、強い意志が宿っていた。

インターハイ、国体など、全国規模の大会では、準決勝敗退。選考会は、初の決勝進出を目標にしていた。選考会は天候が荒れ、波はこれまでに体験したことのない高さ。最悪のコンディションだった。工藤大將監督はレース直前、不安げな加藤に「今回は、通常よりパドルを寝かせて、遠いところでこげ。丁寧な操作を心掛けろ」と指示を出した。普段とは逆の動きだが、重心が安定し転覆の危険性が低くなる。慣れない動きに戸惑いながらも、予選、準決勝を突破し、目標である決勝に駒を進めた。「初」の決勝、5位に入れば上出来と、工藤も本人も思っていた。「ゴールまで全力」周りを見ずに「ゴールだけ見ろ」。普段は絶対に出すことのない指示。全てを出し切り、

完漕させることが狙いだった。

代 表入りが掛かった大一番でも「力を出し切ることしか考えていなかった」。レース前半はそう思っていた。しかし、残り200m。レースは大きく動いた。トップを独走していた選手が転覆した。転覆すれば即失格。どんなに速くても、一瞬の判断ミスが全てを奪い去る。

変わってトップに立った選手も、立て続けに転覆。加藤の3位争いは一転してトップ争いとなった。工藤は「とにかく無事にゴールしてくれ」と祈った。例年、代表は上位2人が選ばれ、残りはレース後の会議で決定される。このままゴールすれば、代表入りはほぼ確定する。

「ここまでできたなら意地でも2位でゴールする」
普段は欲を見せない加藤の気持ちに火が着いた。ゴールだけを見て、全身全霊を込めてパドルをこいだ。結果、見事2位でゴール。数日後、代表内定の連絡が届いた。
加 藤のこれまでの道のりは、山あり、谷あり。決して順風満帆ではなかった。

小4の時、小学生を対象とした体験事業でカヌーと出会った。うまく乗れず、スタート位置にすら付かなかつた。「みんなを待たせた挙句、自分だけスタートできなかった。もうカヌーなんて乗らないと思った」と当時を思い出し苦笑いする。その事業には小6まで参加。嫌だと思った

カヌー体験にも参加した。

「スタートできないまま終わるのは嫌だったから」と話すとおりに、とにかく負けるのが嫌だった。負けたくないから、マラソンでも、徒競走でも、必死で練習した。

中 学進学後、陸上部へ。1000mハードルを選んだ。1年の市陸上新人大会では8位入賞。順調な滑り出したのだが、徐々に尻つぼみになり、3年の中総体直前で、走り幅跳びに種目変更した。自分より後から入部した同級生に勝てなくなったからだ。周りとの実力差に諦めている自分がいた。大会直前の種目変更で結果は出るわけもなく、後悔を胸に抱いたまま陸上生活は終わった。

高校では、友達達の誘いでカヌー部に入部。体験入部での楽しさが、小学時代の苦い思い出を忘れさせた。カヌーを始めて2年。時には悔しい思いもした。しかし「諦めて適当に過ごすのはもう嫌。あの頃には戻らない」ときっぱり。仲間たちも「美奈は本当にどんときも諦めない」と笑顔を見せる。

「カヌーに必要な身体能力で、飛びぬけたものはない。しかし、絶対に諦めない気持ちと、持てる力を出し切る能力は、間違いなく国内でトップクラス」と工藤は目を細める。

自 分に負けたくない本場の「負けず嫌い」に成長を遂げた加藤。自分に負けずこぎ続けた先には、東京五輪が見えてくる。